JFL 環境の中国人学習者における「シタ？」質問文の否定回答[1]
—テイナイとナカッタの選択に関して—

趙　麗雯

1. はじめに

現代日本語の動詞述語形式「シタ」は過去のテンスと完了のアスペクトという二つのカテゴリーを兼ね備えている。それを質問文に用いた場合、否定回答の形式には、過去の否定である「ナカッタ」と完了の否定である「テイナイ」の二種類が使われている。

(1) モウ昼食ヲ食ベタカ。　イヤ（マダ）食ベテイナイ。
　　*食ベナカッタ。
(2) キノウ、昼食ヲ食ベタカ。　イヤ食ベナカッタ。
　　*食ベテイナイ。　（寺村 1982：321-322）

また、同じ否定回答の「シテイナイ」は下記のような「ナカッタ」と置き換え可能であり、「マダ」が使えない場合にも多用されていると多くの研究で指摘されている（高橋 1988、井上 2001、松田 2002 など）。

(3)　昨日、パーティーに出た？
　　a. ううん、出ていない（出てない）。
　　b. ううん、出なかった。　（松田 2002：35）

このように、日常会話で頻繁に使用されている「シタ？」質問文に対して、その否定回答は形式も意味用法も多様であり、それぞれの回答形式がお互いに関連して複雑な体系を成している。それゆえ、母語に類似した形式の区別がない、しかも、日本語母語話者からのインプットが限定された JFL 環境の学習者には、「シタ？」質問文に対する否定回答の意味理解や使用に混乱が見られると予測できる。そこで、「シタ？」質問文に対する否定回答が日本語学習者によってどのように使用されるかを明らかにし、これまでの指導法の妥当性を考察することが重要な課題であると思われる。本稿では中国語を母語とする JFL 環境の学習者を対象に、会話完成テストを通して「シタ？」質問文の否定回答の習得状況を調査し、学年と教科書から習得に影響する要因を探る。

---

[1]実際の会話では「昼食を食べましたか？」という質問に対して、「いいえ、昼食は抜きました。」などのような「ナカッタ」や「テイナイ」を使わない否定回答も多いが、本稿では、動詞の活用形の習得に絞って考察するため、高橋（1988）に従い、「シタ？」質問文に対する否定回答を「動詞のうちけし形式を用いた回答形式」に限定する。

2. 先行研究と研究目的

2.1「シタ」の多義性に基づいた研究

「シタ」の多義性に基づいて、「シタ？」質問文の否定回答として、「ナカッタ」と「テイナイ」の区別を論じた研究には寺村（1982）、庵（2001）、山下（2004）が挙げられる。

寺村（1982：321）は、「シタ」には、「過去の事実」と「現在の既然」という二つの意味用法があり、「過去の事実」はテンスの用法であり、「現在の既然」は現在テンスと既然アスペクトが重なったものであると述べ、さらに、「問答では、答えが否定の場合はその違いが顕在化する」と指摘している。

庵（2001）は寺村（1982）を受け、「シタ」には「過去」と「完了」という二つの意味があるとしている。さらに「シタ？」質問文に対する否定回答では、下記の例のように、質問している行為の実現可能な時点と発話時に近いかどうかによって完了の否定（「テイマセン/テイナイ」）と過去の否定（「マセンデシタ/ナカッタ」）を使い分けると指摘している。

(4) A：（午後6時ごろに）昼ご飯を食べましたか。
　　B1：はい、{ø/＊もう}食べました。
　　B2：いいえ、{食べませんでした/＊まだ食べていません}。
(5) A：（午後1時ごろに）昼ご飯を食べましたか。
　　B1：はい、{ø/もう}食べました。
　　B2：いいえ、{＊食べませんでした/まだ食べていません}。　（庵2001：145）

山下（2004）は、「シタ」の多義性を認めた上、アッタニーポーン・馬（2002）[2]が30名の日本語母語話者を対象に行った「各場面での「シタ」質問文に対する最も自然だと思う答えを選択してもらう」という調査の結果を検討している。その結果、「シタ？」質問文の否定回答の中で、「ナカッタ」の使用条件は、下記の例のように、話し手と聞き手の間に「過去の場の共有」が存在することであると結論づけている。

(6) 学生：昨日小樽へ行きました。
　　先生：面白かったですか。
　　学生：ええ、とても、いろんなところへ行きました。
　　先生：○○ガラスでガラス細工を買いましたか？
　　学生：いいえ、行ったんですけど、お金がなかったので、買いませんでした。
　　（山下2004：7）

[2] アッタニーポーン・スサンサニー・馬（2002）北海道大学大学院国際広報メディア研究科修士課程、比較日本語論演習期末レポート

2.2「テイナイ」に注目した研究

一方、実際の日常会話では、「過去時（に）何々シタか？」に対しても前述の（3）のような「テイナイ」が頻繁に用いられているという報告がある。ザトラウスキー（1982）は電話調査で、500 人を対象に「○○は昨日見たか」、「○○は読んだか」という質問をし、その回答の実態を収集したところ、肯定の回答で「テイル」系が最も少なかったのに対して、否定の回答では「テイナイ」という回答が「ナカッタ」より、圧倒的に多いということが明らかになった。「テイナイ」は「完了の否定」より用法がかなり複雑であることが実証的に確認された。

この類の「テイナイ」のみに注目し、その位置づけを言及した研究には、高橋(1988)、井上（2001）と松田（2002）が挙げられる。

高橋（1988：89）はこの現象について、「過去に運動がなかったことを『していない』で表す用法は、会話文のなかではかなりひろくつかわれている。これらは『していない』の形を取っているが、持続の局面のなかにあるという継続相のアスペクト的意味ももっていないし、また、前現在[3]の意味を積極的に示しているわけでもない」と述べ、この種の「テイナイ」を「前現在のテンスから解放された用法」と位置づけ、「テイル」の経験・記録用法に近いものであるとしている。さらに、その意味を「過去に運動がなかったことを、もっとすんなりのべている」と捉えている。

井上（2001）は、「タ」はテンスの意味のみを表していると主張し、「シタ?」質問文に対する否定回答の「シテイナイ」を「(マダ) シテイナイ」と「(*マダ) シテイナイ[4]」に分けて、「実現想定区間」[5]という概念を用いて、「テイナイ」の意味を論じた。「発話時が該当出来事の実現想定区間内にあり、出来事の非実現が最終的に確定されないうちは、『(マダ) シテイナイ』が用いられる」、「話し手が該当の出来事が実現される可能性そのものを認めない場合は、やはり『(*マダ) シテイナイ』」が用いられると述べている（井上 2001：132-133)。

松田(2002)は先行研究を踏まえ、テイル/テイナイの基本的な意味を＜過去時ニ何々シタ（という事実が）アル/ナイ＞として捉え、「過去時ニ何々シタカ」に対して何故シテイナイで答えることができるのかを以下のように説明している。

＜過去時ニ/今マデニ＞			＜発話時判断＞
シテイル・シテアル	＝何々シタ	という事実（結果）が	アル
シテイナイ	＝何々シタ	という事実（結果）が	ナイ

（松田 2002：38)

[3]高橋（1988：80）では「テイナイ」の「前現在」の用法を「犯人が来るかもしれないと、みはっていたんですが、客はまだ一人も入っていません」のような「現在以前に運動の成立がないことである」としている。

[4]井上（2001：134）では「(*マダ) シテイナイ」は「まだ」の意味をともなわない「シテイナイ」を示す。

[5] 井上（2001：127）では、該当の出来事がいつ実現されてもおかしくない区間を「実現想定区間」としている。

以上で示したように、この種の「テイナイ」の位置づけについては、日本語学の観点から様々な分析がなされているが、まだあまり一致した見解が得られていないようである。それゆえ、日本語の習得研究においても、学習者の「ナカッタ」、「テイナイ」の使い分けに関しては、これまで焦点が当てられてこなかった。

2.3 研究目的

本稿はJFL環境の中国人学習者を対象に、「シタ？」質問文に対する否定回答の「テイナイ」と「ナカッタ」に注目し、両形式がどのように学習者に選択されるかを明らかにする。具体的には以下の２点に注目する。

①JFL環境の学習者が「シタ？」質問文に対して、「ナカッタ」と「テイナイ」の選択の傾向の特徴を明らかにし、その特徴には学年が関わっているかを調査する。

②日本語教科書が学習者の選択にどのように影響しているかを究明する。

3. 調査方法

3.1 調査の内容

本稿では、先行研究の観点を考慮し、「シタ?」質問文に対する否定回答の「ナカッタ」と「テイナイ」の意味用法を以下の３種類に規定する。

表１「過去時シタ？」質問の否定回答

表現	意味	具体例
ナカッタ	出来事が過去時点に起こらなかったことを示すもの	A:先月、中国に行った？ B:ううん、行かなかった。
(まだ) テイナイ	過去の事態を現在に基づいて議論している。出来事が発話時（現在）まで実現されていないが、その実現の可能性が残されていることを示すもの。	A:もう、中国に行った？ B:ううん、まだ行っていない。
(*まだ) テイナイ	過去の事態を現在に基づいて議論している。出来事が発話時（現在）まで実現されておらず、しかも、その実現しない結果が既に事実になり、実現の可能性は残されていないことを示すもの。	A:事故現場に行った？ B:ううん、行っていない。

注：(*まだ) は「まだの意味をともなわない」ことを示す

3.2 調査概要

【調査協力者】中国国内の大学の日本語科[6]で日本語を学ぶ、２年生（学習歴１年半、学習時間約720時間）37名と３年生（学習歴２年半、学習時間約1200時間）46名、計83名である。調査協力者は全員来日経験がなく、使用する教科書は『新编日语(修订本)』（上海外语教育出版社）である。事前に学習者のレベル判定のために、２年生と３年生を対象に、日本語能力試験N3とN2に相当する文法問題、各10問からなるテストを行った。本調査は事前テストの正解率が80%以上の２年生と３年生のみに実

[6] 黒龍江省のハルピン師範大学と浙江省の温洲医科大学の日本語科である。

施した。

【調査項目】先行研究で指摘された適用場面を参考にし、「シタ？」質問文に対する否定回答として、「ナカッタ」、「(まだ) テイナイ」と「(*まだ) テイナイ」の使用を誘導するためのシチュエーションを設定して、設問を作成した。なお、文脈の読み取り方によって母語話者でも回答に揺れが生じることもあるため、設問を作成する際、筆者自身の判断だけによらず、先行研究の著書にあげられた例を裏付けとしつつ、母語話者 5 人と討論した。5 人の意見が一致した設問のみを調査項目とし、それ以外は除外した。

3 種類の回答をそれぞれ 3 問ずつ、ダミーを 6 問入れて、計 15 問を含む会話完成テストを用いた。各設問に使用した動詞は『新編日語 I 』の単語リストの既習語彙に限定した。「ナカッタ」、「テイナイ」以外の回答を避けるため、各設問毎に使用する動詞を括弧内に提示し、その動詞を使って質問に回答させた。

問題の一例を以下に示す。

(7) あなたは先生に聞かれたら、どう答えますか。
先生：この前貸した本、読んだ？
あなた：すみません、＿＿＿＿＿＿。実は昨日までレポートで忙しくて…（読む）

(9) 昨日一緒に残業した同僚に聞かれた時、あなたはどう答えますか。
同僚：昨日はお疲れ様でした。終電に間に合いましたか。
あなた：いえ、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。結局タクシーで帰りました。（間に合う）

以上に示した問題 (7) は「(まだ) テイナイ」項目の設問であり、正解は「テイナイ」系であり、「テイマセン」、「テマセン」、「テナイ」などを正答とする。問題 (9) は「ナカッタ」項目の設問であり、正解は「ナカッタ」系であり、「ナカッタ」、「マセン」などを正答とする。なお、本稿は「ナカッタ」と「テイナイ」の選択に絞っているため、動詞の活用形の誤用などがあっても正答と見なす。

調査を実施するにあたっては、問題用紙を配布し、協力者に「括弧の中の動詞を使って、自然だと思う内容」で回答してもらい、時間制限は設けなかった。調査を実施した後、それぞれの項目の正答数を集計し、分析した。また、学習者の選択の傾向を明らかにするために、正解以外の回答の形式も集計し、分類した。

4. 調査の結果

本節では、まずテストの結果をまとめて述べ、次にそれぞれの項目の選択の傾向を順に述べ、次節において習得に影響する要因を教科書の面から分析する。

4.2 回答の全般的傾向

3項目それぞれの一人あたりの平均正答数を学年別に図1に示す。

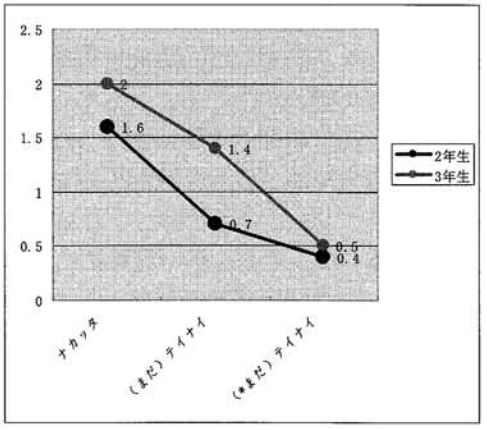


図1 項目ごとの平均正答数

2年生でも3年生でも、「ナカッタ」項目は平均正答数が最も高く、「(まだ) テイナイ」「(*まだ) テイナイ」の順で続き、その中、「(*まだ) テイナイ」項目の平均正答数は3年でも0.5点に過ぎないことが分かった。

この結果に対して、学年×項目の2要因分散分析を行ったところ、2学生と3年生との間に1%水準で有意差が見られ ($F_{(1,\ 243)}=27.17$、$p<.01$)、3つの項目との間にも1%水準で有意差が見られた ($F_{(2,\ 243)}=106.61$、$p<.01$)。また、相互作用も5%水準で有意差が認められた ($F_{(2,\ 243)}=3.54$、$p=.031<.05$) ため、単純主効果の検定を行った。結果は図2と図3に示す。



図2 項目による有意差(学年別)

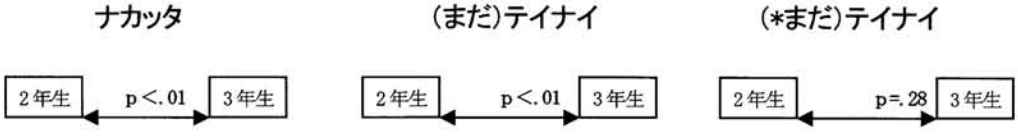


図3 学年による有意差(項目別)

図1と分散分析の結果を照らし合わせると、学習者が「シタ?」質問文に対する否定回答の「ナカッタ」、「(まだ) テイナイ」、「(*まだ) テイナイ」の習得について、以下の2点にまとめることができる。

①学習者にとって、3種類の回答の難易度は「ナカッタ」＞「(まだ) テイナイ」＞「(*まだ) テイナイ」の順になっている。この難易度は2年生においても3年生においても共通している。
②学習者のレベルによって、各項目の習得が進むかに関しては、「ナカッタ」と「(まだ) テイナイ」項目において、3年生は2年生より平均点が有意に高く、習得が進んでいる傾向を示す。一方、「(*まだ) テイナイ」に関しては、3年生と2年生の間に差がなく、学年が上がっても習得が進まないことが言える。

4.3 項目別の分析

本節では、3 種類の項目において、学習者が正答以外にどのような形式で回答しているかを学習者の使用例を挙げながらまとめる。

4. 3.1「ナカッタ」項目

「ナカッタ」で回答すべき3問に対する回答は、正解の「ナカッタ」以外に、主に非過去の否定形「ナイ」に集中している。各形式の使用数と割合を表2に示す。

表2「ナカッタ」項目の回答傾向

		回答	ナカッタ	テイナイ	ナイ	その他	合計
学年	2年生	回答数	60	4	33	14	111
		割合	54%	4%	30%	12%	100%
	3年生	回答数	94	7	26	11	138
		割合	68%	5%	19%	8%	100%
合計		回答数	154	11	59	25	249
		割合	62%	5%	24%	9%	100%

以上の結果に対して、2 変量カイ二乗検定を行った結果、有意差が見られなかった（χ^2= 6.67, p=.083）。

正答の「ナカッタ」の使用率が最も高く、2年生の54%から3年生の68%に上がり、習得が進む傾向を示すが、2 年生と 3 年生の間に有意差が見られないことから、安定して習得されていることが分かる。一方、2年生から「ナカッタ」を非過去の否定「ナイ」で回答する現象は観察され、3年生において若干少なくなるが、有意に減少せず、依然として存在すると言えよう。

4. 3.2「(まだ)テイナイ」項目

「(まだ) テイナイ」で回答すべき3問に対する回答は正解の「テイナイ」以外に、主に「ナカッタ」と「ナイ」の両形式に集中している。各形式の使用数と割合をまとめると、表3になる。

表3「(まだ)テイナイ」項目の回答傾向

		回答形式	ナカッタ	テイナイ	ナイ	その他	合計
学年	2年生	選択数	43	27	35	6	111
		割合	39%	24%	32%	5%	100%
	3年生	選択数	39	64	28	7	138
		割合	29%	46%	20%	5%	100%
合計		選択数	82	91	63	13	249
		割合	33%	37%	25%	5%	100%

以上の結果に対して、カイ二乗検定を行ったところ、1%水準で有意差が見られた（χ^2= 13. 3, p <. 01）。別途算出された残差分析では、有意水準5% (両側) の1. 96より、絶対値で大きい形式は「テイナイ」と「ナイ」の両形式となっている。

正答の「テイナイ」は使用率が2年生の24%から3年生の46%に上がり、有意に高くなり、習得が進んでいると考えられる。一方、「(まだ) テイナイ」を「ナカッタ」と「ナイ」で代用する現象が多く、特に2年生の段階はこの両形式の使用率は正用を上回っている。3 年生においては「ナイ」の誤用は有意に減少するが、「ナカッタ」は依然として高い割合で使用されている。

また、学習者の回答には、正用誤用を問わず、「マダ」の使用が著しく高いことも挙げられる。「マダ」が正答の「テイナイ」とともに出現するのは勿論、「ナカッタ」と「ナイ」との共起も多かったことは興味深い。例えば、下記に示した問題 (3) 、設問文に副詞「モウ」が含まれた場合、「まだ出さない」と答えた学習者が2年生人8人、3年生9人、「まだ出さなかった」と答えた学習者が2年生7人、3年生11人いる。このような「マダ」の過剰使用が突出する現象は、学習者が「マダ」自体を「(まだ) テイナイ」の用法として用いる可能性を示唆すると思われる。

問題 (3) あなたは同級生にどう答えますか。

(教室で) 同級生：明日締切のレポート、もう出した？

あなた：ううん、まだ出しません。／まだ出しませんでした。(出す)

4. 3.3「*(まだ)テイナイ」項目

表4に示すように、「* (まだ) テイナイ」で回答すべき3問に対する回答は、正答の「テイナイ」の選択率が低く、3年生においても16.7%に過ぎない。

表 4 「*(まだ)テイナイ」項目の回答傾向

		回答形式	ナカッタ	テイナイ	ナイ	その他	合計
学年	2年生	選択数	56	13	24	18	111
		割合	51%	11%	22%	16%	100%
	3年生	選択数	65	23	20	30	138
		割合	47%	17%	14%	22%	100%
合計		選択数	121	36	44	48	249
		割合	48%	15%	17%	20%	100%

以上の結果に対して、カイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られなかった（χ^2= 3.93, p=.26)。正答の「*（まだ）テイナイ」の数が少なく、3 年生であっても有意に上がらず、習得の難しさがうかがえる。

一方、「*（まだ）テイナイ」を使わず、「ナカッタ」と「ナイ」を使用することが多く見られた。特に「ナカッタ」の誤用は3年生になっても有意に減少せず、50%に近いというやや高い割合で使われていることが分かる。

また、問題（4）に対して、「ナカッタ」、「テイナイ」、「ナイ」のいずれも使わず、「経歴」の意味を表す「たことはない」を用いた学習者が若干いることも興味深い（2年生4人、3年生6人)。このような混同が生じる原因は学習者の母語の影響によるのか、指導の影響によるのかを明らかにするには、実験の方法を改めて更なる検討が必要であると考えられる。

問題（4）　テスト中に先生に次のように聞かれた時、あなたはどう答えますか。

先生：鈴木、今田中の答案、見ただろう？

あなた：いや、僕は見たことはありません。消しゴム借りただけなんです。（見る）

5. 教科書調査

本稿の調査協力者は全て教室以外のインプットを受けにくく、教室指導により日本語を集中的かつ構造的に学ぶ JFL 環境の学習者である。そのため、学習者の選択傾向、特に代用形式が起きる要因の一つとして、教科書の影響が考えられる。そこで本節では、日本語教科書における「シタ？」質問文とその否定回答を調査する。

学習者が使用している教科書を含む、合計4種類の初級、中級教科書[7]の記述を調査した。対象とした教科書は中国で広く使用されており、学習時間、シラバス、想定す

[7]調査した教科書は【A】『みんなの日本語（初級、中級)』（スリーエーネットワーク）【B】『新文化初級日本語、文化中級日本語』（文化外国語専門学校）【C】『新编日语(修订本)Ⅰ、Ⅱ』（上海外语教育出版社）【D】『新版中日交流标准日本语初级』『标准日本语中级』（人民教育出版社）の4種類である。（【】内は文中で言及する場合の略記）

る授業法、対象者などの偏りはないと思われる。

まず、調査対象とする教科書で、「シタ?」質問文とその否定回答はどう記述されているかについて検討した。その結果、4種類の教科書は全て初級の早い段階で「シタ」を動詞の過去形として導入し、「シタ」を用いた質問文の否定回答は「ませんでした」であると記述している。典型的な例は下記のように挙げられる。(日本語の部分は筆者の訳)

> 肯定地叙述现在的习惯动作，状态以及未来的动作、状态时，用“ます”，其否定形式为“ません”。肯定地叙述过去的动作时，“ます”要变成“ました”，其否定形式是“ませんでした”，这两种都是礼貌的表达形式。
>
> (現在の習慣、状態や未来の動作を述べる時、「ます」を使う。否定の時は「ません」を使う。過去の動作を述べる時、「ます」は「ました」となる。否定の時は「ませんでした」となる。どちらも丁寧な言い方である。)

(『中日交流标准日本语初级Ⅱ』: p69)

それ以外、『新编日语Ⅰ』においては、「ナカッタ」を導入するとともに、「(まだ)テイナイ」の省略形式「まだです」という表現も文法項目として提示している。記述の内容は下記の通りである。(日本語の部分は筆者の訳)

> 肯定的过去式作问句时，还可以询问某种动作、作用现在是否已经完了或实现。这种问句常和副词「もう」呼应使用。回答时，如果对问句的回答是肯定的，要用过去式，对问句的回答是否定的，要用「まだです」。
>
> (動詞の過去形を質問文に用いる場合、ある動作、作用が既に完了した、或いは実現したことを表す。このような質問文は副詞「もう」と共起する場合は多い。回答には、肯定の場合は過去形を使い、否定の場合は「まだです」を使う)
>
> ●李先生はもう来ましたか?(李老师已经来了吗?)
> はい、来ました。(来了。)
> いいえ、まだです。(不，还没来。)
> ●今日は新聞をもう読みましたか。(今天的报纸看了吗?)
> はい、読みました。(看了。)
> いいえ、まだです。(不，还没看呢。)

(『新编日语Ⅰ』: p113)

この文法解説は、「もう」と「まだです」の提示により、「ナカッタ」と「(まだ)テイナイ」の使い分けを「モウ」と「マダ」の対立と単純化している。それゆえ、教師が教育現場で説明しないと、初級学習者が「(まだ)テイナイ」の意味を表す形式は「まだです」だと誤解してしまう危険性が生じると考えられる。

アスペクトの知識を導入する際、4種類の教科書の中で、「完了」としての「シタ」を改めて取り挙げ、「シタ」質問文の二種類の否定回答を記述する教科書は『新文化初

級日本語Ⅰ教師用指導手引き書』しかない。記述の内容は下記の通りである。

A：もう学校を決めましたか。
B1：はい、もう決めました。
B2：いいえ、まだ決めていません。
・　行為が完了したかどうか尋ねる表現と、答える表現を学習する。
・　「はい」の時は質問文と同じ過去形であるのに対し、「いいえ」の時は「～ていません。」となることに注意する。「～ていません。」と「ませんでした。」と「ません。」の違いは下記の通りである。
「おべんとうを買いましたが、まだ食べていません。」　…まだ行為が完了していない。
「今日は忙しかったので、昼ご飯を食べませんでした。」…否定
「私はいつも昼ご飯を食べません。」　…否定
・例文 3）のように、「いいえ、まだです。」も「いいえ、、まだ～ていません。」と同じように使う。

『新文化初級日本語Ⅰ教師用指導手引き書』：p93）

この記述は寺村（1982）らを受けて、「モウ何々シタカ？」に対しては「マダシテイナイ」、「過去時（に）何々シタか？」に対しては「シナカッタ」と答えるように指導する例である。このような記述は「（まだ）テイナイ」を提示するだけでなく、他の否定回答との区別も例を挙げて説明しており、学習者のニーズを考慮していると考えられる。

それ以外で、「（*まだ）テイナイ」を記述する教科書は見られない。従って、教師が「（*まだ）テイナイ」の用法に注意しておかなければ、見過ごされてしまう可能性が大きいのではないかと思われる。

次に、各教科書の本文において、「シタ」質問文の出現回数、その否定回答の「ナカッタ」、「（まだ）テイナイ」と「（*まだ）テイナイ」それぞれの出現回数などの内容に着目して調べた。結果を表5に示す。

表5と前述の調査結果を合わせて考察すると、日本語教科書における「シタ」質問文とその否定回答の問題点を以下の3点にまとめる。

①「シタ?」質問文の否定回答の出現回数は比較的に少ない。限られた否定回答の中でも、「ナカッタ」系がほとんどで、「（まだ）テイナイ」は2例し見られない（例④⑥）。アスペクトの知識を導入しても、「テイナイ」を改めて提示しない教科書もある（CD）。

②「*（まだ）テイナイ」は4種類の教科書において1例も見られず、指導が不十分であると言えよう。「*（まだ）テイナイ」が習得しにくい原因の一つは教科書で重要視されていないことであると考えられる。

③完了の「シタ」質問文の回答では、「（まだ）テイナイ」の代わりに、省略の「まだです」（例①⑨⑪⑬）や、間接の否定回答（例②⑤⑦⑩）で現れる例が多く見られた。「マダ」のみが「（まだ）テイナイ」として用いられる誤用が起きる原因はこのような省略形式の提示にあると考えられる。

表 5 各教材における「シタ」質問文とその否定応答の扱い方

教材番号	出現回数	否定回答			会話例
		ナカッタ	(まだ)テイナイ	(*まだ)テイナイ	
A	32	1	1	0	①もう昼ごはんを食べましたか。　…いいえ、まだです。(第 7 課) ②山田：日本へ来てから、馬の写真を取りましたか。　サントス：いいえ。(第 18 課) ③きのう、木村さんに会った？　…ううん、会わなかった。(第 20 課) ④レポートはもうできましたか。　…いいえ、まだ書いていません。(第 31 課) ⑤故障の原因は分かりましたか　…いいえ、今調べているところです。(第 46 課)
B	8	3	1	0	⑥先生：そうですか。もう学校を決めましたか。 鈴木：いいえ。まだはっきり決めていません。(第 11 課) ⑦店員 A：見つかりましたか。　客：いいえ。(第 19 課)
C	25	3	0	0	⑧李：ファックスは届きましたか。 小野：ええ、ファックスもメールも届きましたよ。(第 8 課) ⑨加藤：森君、住む所はもう決まったの？ 森：いいえ、まだなんです。(第 28 課) ⑩甲：李さん、この本はもう読み終わりましたか。 乙：いいえ、昨日読み始めたばかりです。(第 40 課) ⑪甲：もうその資料をご覧になりましたか。 乙：いえ、まだです。(第 47 課)
D	18	6	0	0	**⑫李：お酒も飲みましたか。** **木村：いいえ、お酒は飲みませんでした。(第 7 課)** **⑬…李さんはもうみましたか。　木村：いいえ、まだです。(第 7 課)**

太字は学習者が使用している教科書であることを示す

以上の分析を通して、特定の母語話者を対象とせずに作成された教科書でも、中国語母語話者を対象に作成された教科書でも、「シタ?」質問文とその否定回答の多様性に関する考慮は欠けていることが明らかになった。確かに初級段階では、「シタ/ナカッタ」を「スル/ナイ」の過去形として規則的な導入は理解しやすいと思われるが、過度の単純化を求め、文法項目の多義性を無視すると、誤解や誤用を招き、習得の妨げになる危険性があると考えられる。今回の調査で、学習者は「(まだ) テイナイ」の正答率が低く、「* (まだ) テイナイ」の習得が難しいこともこの過度の単純化に起因すると考えられる。

また、教科書以外に、学習者の母語からの影響も考慮しなければならない。本稿の調査対象者の母語である中国語は、テンスの文法形式のない言語であると言われている (木村 1982)。そのため、学習者が過去の否定を非過去の否定形式「ナイ」で代用する現象は中国語の母語転移による可能性が考えられる。しかし、本稿は中国語母語話者のみを対象としたため、この現象は中国語話者特有な現象なのか、学習者の母語に関わらず普遍的に存在するかを判断することは難しい。母語転移の可能性を検証するには、今後母語の異なる対象者を増やし、更に検討する必要性が求められる。

6. まとめ

本稿は、「シタ？」質問文の否定回答としての「ナカッタ」、「テイナイ」を「ナカッタ」、「(まだ) テイナイ」、「* (まだ) テイナイ」の3種類に分類した上で、会話完成テストを用いてJFL環境の中国人学習者の使用状況を考察し、以下のような結果が得られた。

①3種類の回答の難易度は「ナカッタ」＞「(まだ) テイナイ」＞「(*まだ) テイナイ」の順になっている。この難易度は学年を問わず共通している。その中、「(*まだ) テイナイ」の習得が最も難しく、3年生においても正答率が20%以下である。

②「ナカッタ」と「(まだ) テイナイ」の選択は学年が上がるにつれて、習得が進む傾向を示すが、「* (まだ) テイナイ」の選択は学年が上がっても習得が進まないことが分かった。

③「ナカッタ」を使用すべきところに「ナイ」で回答する、「(まだ) テイナイ」を使用すべきところに「ナカッタ」と「ナイ」で回答する、「* (まだ) テイナイ」で使用すべきところに「ナイ」と「ナカッタ」で回答するという代用現象が多い。特に「* (まだ) テイナイ」項目において、「ナカッタ」の選択率が著しく高いことが明らかになった

④教科書の単純化は学習者の習得に影響する可能性があると考えられる。

本稿は新たな試みとして、日常会話で頻繁に使われる「シタ？」質問文の否定回答が学習者にどのように習得されているかを調査した。なお、本稿の調査は対象者、実験の方法及び調査の内容が限定されていたため、学習者習得のメカニズムを明らかにするにはまだ検討の余地があると思われる。

今回の調査はJFL環境の中国語母語話者であるため、学習者の選択傾向に影響する他の要因、例えば学習者の母語、学習環境、インプットの有無などは検討していない。また、会話完成テストを用い、学習者の産出はある程度反映しているが、使用する動詞を予め限定しているため、実際の言語行動には則していないと考えられる。さらに、調査内容は「ナカッタ」と「テイナイ」の両形式に限定しているが、過去のことを質問されたときは、「主体的な否定的主張」を前面化させる場合、非過去の「ナイ」も使用できるという指摘がある（工藤 1996）。今後は調査項目を増やし、対象者や調査方法を改めて、学習者の選択に影響する文脈を考慮しながら研究を進めていきたい。

参考文献

庵功雄（2001）『新しい日本語学入門』，pp 145-151 スリーエーネットワーク
井上優(2001)「現代日本語の「タ」ー主文末の「…タ」の意味についてー」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』，pp 97-159 ひつじ書房
木村英樹（1982）「テンス・アスペクトー中国語」森岡健二他編『講座日本語学』第11巻，pp19-39 明治書院
工藤真由美(1996)「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会編『言葉の科学7』，pp 87-136 むぎ書房
高橋太郎（1988）「うちけしのテンスについて」『麗澤大学紀要』47号 pp75-96 麗澤大学
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
松田文子(2002)「『過去時ニ何々シタカ』に対する否定の返答形式：シテイナイとシナカッタの選択に関して」『日本語教育』113, pp 34-42
ポリー・ザトラウスキー（1983）「プラグマティックスから見た日本語の動詞のアスペクトー特に否定の形の場合において」『言語学論叢』2, pp 48-64 筑波大学
山下好孝（2004）「テンスの「タ」とアスペクトの「タ」」『北海道大学留学生センター』第8号，pp1-13 北海道大学

（ちょうれいぶん・首都大学東京大学院博士後期）